

twitterで怪談2011
401話～500話

(C) quilt

short story401 「盗まれた足音？— 1 —」

人通りの多い所を歩いていると、
耳障りな程、足音が気になる事はないだろうか？

もし、
そんな足音に気付いたら、
さり気無く、素早く、立ち去る事を勧める。

何故なら、

.....

それは、人の足音では無いから、

.....

だが、
手遅れなら.....、
君の足音は盗られるよ！

short story402 「人混みに紛れる悪戯者— 1 —」

人混みに紛れる悪戯者。
人をからかい日暮れを待つ。

「あれ？あの人さっきも擦れ違った？」
私は小声で言う。

「あ……やだ」
「また、あの角に……」
と、恐怖が顔に滲む頃……、

ケタケタケタッ！

妙な足音で迫り来る人影は、
擦れ違う頃には人では無かった。

short story403 「一人残る— 1 —」

廃屋の様（よう）な私の実家。
廃屋の様（よう）に見えるのは、当然かもしれない。
家人は、居ないのだから……。

「私が殺したもの。居るはずは無い」

声に出しても、私を咎める者は居ない。

私が殺しきる前に、
村は伝染病で全滅したのだから……。

一人残る生き地獄。

short story404 「人肉の壁— 1 —」

セピア色に染まる風景。
此処は、
何も変わってはいない気がして……。
只、庭にある木が歳月を物語る。
そして、
只……。

「恨めしい」

この壁だけが在り在りと生生しく血を流し、
今だ、
時に逆らう様に、
人を喰らおうとする。

私で最後にと願い。
喰られる。

short story405 「時の中のセピア色の風景— 1 —」

時を潜りセピア色の風景に身を染め、
これから行なわれる惨劇を阻止しようとする。

ドクン！

惨劇が始まる。

私は、
振り翳（かざ）す斧を身に受け、
斧を振り翳（かざ）す者を羽交い絞めにし阻止をする。

しかし、
想いは届かない。

『霊になって、人は殺せるのにね……』

short story406 「雪化粧をする庭— 1 —」

窓から深々と降る雪を眺める。

庭に、
雪の積もらない場所があり、
そこには、
何かが存在するかの様（よう）で……。

「事故だって！お父さんが……」

母がノックもせずに部屋に入り泣き崩れる。

病院へと急いだ私達は、
意識を取り戻した父を見た。

「庭の雪、綺麗だったな……」

short story407 「闇兎— 1 —」

闇兎を飼う事にした。

闇市で入手。

愛（め）でるだけでは物足りないので、
欲望に反応する兎を選んだ。

どうやら、

金銭欲に反応する様だ！

試しに宝くじを買ってみた。

当たる！

何を買っても当たり放題！

俺は大金持ちだ！

だが、兎の好物は札束だった。

short story408 「闇の賭け事—1—」

あの階段を昇る為に俺は戦う。
踏み入れた闇の世界。
この賭けは抜ける事が出来ない。
俺の命が尽きるか、奴らが果てるか……。

念を込めた武器と、
生贄を手駒に、
戦いは熱を佩（お）びる。

罵声や悲鳴、
歓喜の音が、
響く。

血飛沫を上げ手駒が死ぬ。
勝てるか！

short story409 「吸血鬼—1—」

戻れぬ階段を……。
降りる事になるとは、
思わなかった。

まだ私が、
人で在り続ける為に。
降りたはずなのに……。

そこは闇の住人。
吸血鬼達の巣窟だった。

不治の病が治るなんて迷い事。

聞くんじゃなかった。

私の中に流れる血……。
それは『甘い匂いがする』

short story410 「強制的第六感—1—」

一段一段降りる階段に薬品をばら撒き下へ下へと降（くだ）る。

馬鹿げた話。

見えぬ者を見える様（よう）にする薬なんて！

実験体は強制的に第六感を刺激され、
目にした見えぬ者へと姿を変えていった。

此処はもう……、
化け物の住処。

「焼く尽くしてやる！」
私と共に。

【大吉】地球は貴方のものです。

「え？」

—————妙な御神籤（おみくじ）を引いてから数週間。

やっと、この意味が判った。

私のストレスは、
そのまま地球のストレスとなり、
天変地異が起こる。

堪ったものではない！

しかし、

誰もその事を知らない！

人類は？

地球は！

【吉】貴方は旋風と共に南に進みます。

「は？」

—————妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

俺が南以外の方向を歩こうとすると、旋風が起こり南に戻る。
仕方が無い。

—————数年後、俺は南に進み続け元の場所に戻った。

旋風が吉を呼び込み、
俺は、企業家として大成功！

さて —————

short story413 「御神籤2011—大凶—」

【大凶】 貴方には一年分の闇が贈られます。

「……」

——— 妙な御神籤（おみくじ）に、心の底から俺は落ちた。

「チッ」

新年早々！

その御神籤を丸めて捨る。

すると、闇の固まりになって戻って来た。

——— 闇も使い様……。

手に入れた闇を使い、悪事を働き続け……。

今では、

俺自身が、

闇。

【中吉】可も無く不可も無く望みなさい。

「ん？」

———妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

普通に、一年過ぎると言う事か？

まあ、望めとあるので、

自分が望む結果を唱えてみた。

結果は普通。

面白く無い。

試しに、

「世界制服を望む」

と、唱えると……、

一国の大統領となった。

【小吉】 貴方は正直者ですか？

「へ？」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

御神籤に問われても、
答えようが無い。

だが、時折、
判断に苦しむ事に当たると、

『貴方は正直者ですか？』

と、声がする。

真っ当な答えに辿り着くと、良い結果。
嘘を付くと、悪い結果になった。

【大大吉】出るとは思わなかった。

「え？」

妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

『出ちゃった？』

御神籤から声がしたかと思うと、
神様と名乗る爺（じじい）が目の前に居た。

『で？』

『何を望んじゃうわけ』

「はい？」

『引いちゃったでしょ？』

『まず、神様は、御神酒（おみき）が欲しいなあー』

【凶】 貴方は一年間他人の影です。

「は？」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

其れからの私は、
影となり彷徨い歩いた。

——— 孤独と狂気との戦いも、時が癒し。
『まだ私はいける！』と、心で葛藤。

一年が過ぎた頃、
降ろすべき厄介事は、全て降ろし。
生き返った心地がした。

【末吉】 貴方の財産は冬眠します。

「……」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引き当てる。

父が胃癌でこの世を去る。

財産を整理しようにも……、
冬眠をした様（よう）に手が付けられず……。

俺は、我武者羅（がむしゃら）に働いた。
借金だらけの父の会社も立ち直り、
晩秋を迎える頃、
父の財産が芽を吹いた。

short story419 「御神籤2011—半吉—」

【半吉】 貴方の一年は全て半分です。

「え？」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

冗談じゃない！

と、思ったが……。

御神籤の通り、
食から、睡眠、給料に至るまで、
全て半分で月日が流れて行く。

年の瀬も遍（せま）ったある日。
何度も挫折したダイエットに成功！
預金も増えていた！

【平】 貴方は全て平（たい）らに進みます。

「へ？」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

訳が解からない！

数ヵ月後、
その意味がやっと分かった。

道を歩いても、
仕事をしてても、
何の障害無く平たく収まるのである。
楽な様（よう）だが、刺激は無い。
だか、地道な成果が上がった。

【末小吉】貴方を一年間小さくしましょう。

「え！」

—————妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

私の身体は、七、八歳の子供となった。

慌てて境内（けいだい）に隠れ、

夫に泣きながら電話し、迎えを頼んだ。

一年も暮れとなり、

子供の視線で過ごした一年。

子供に対する在り方を学んだ。

【小凶】 貴方の臓器を一年間貰います。

「！」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引く。

俺が闇医者だからって、似合い過ぎだろ？
と、鼻で笑う。

——— 巨額の金に目が眩み……。

自分の臓器に手を付ける。
不思議な事に、
次の日には、身体は元に戻っていた。

次は、心臓……。

狂気が、俺に沁みる。

【半凶】 貴方にはあの世とこの世で半分生活する券を贈ります。

「は？」

————— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた。

この券のお陰で、
一日の半分は、あの世に飛ばされる！

あの世では鬼の下働き。
この世では冴えない日々。

ある日。
鬼に褒められる。
何だ？此の感覚は！

【末凶】 貴方には未来に続く穴と望む幸福を贈りましょう。

「え？」

——— 妙な御神籤（おみくじ）を引いた後……。

気味の悪い程、望みが叶う。

——— 晩秋の頃から、俺の視界には、

黒い点の様（よう）なものが在る様になり。

師走の今では、巨大な闇の穴が目の前に在る。

行くしかないのか……。

【大大凶】 望め学べ選べ。

「は？」

————— 妙な御神籤（おみくじ）を引く。

髓脳（ずいのう）が犯される……。

そして、声が体中に響く。

「なんだ……」

「俺は……」

「死ぬのか？」

声の主は解からず……。

『終わり方を選ばせてやろう』

「終わり方？」

『人間の世の——』

ククッ、

ハハハッ！

圧倒的な者の前に、俺は—————。

ズズ……ズズ……。

決まった時間に、

素足で、

雪の庭中を歩く雪より白い肌の女。

病床より僕は、

その姿を眺める日々。

———「あ……」

僕の視線が、女に届き。

スー……、

と、瞬きもせぬ間に目の前に女が……。

『斎(いつき)かえ？』

祖父の名を呼ぶ。

「そうだ」

女と行く事にした俺は、病床より離れた。

short story427 「夜中の時計— 1 —」

夜中に何度も振り返り、時計を見る事はありませんか？

『いけませんよ？』

貴方は、誘われているのです。

『何に？』

フフッ……。

『お教えしませんが……』

闇の中で、時計から目が離せなくなった貴方。

やけに時計の音が気になりませんか？

振り返ればそこには……。

short story428 「カレンダーからの招待— 1 —」

ふとカレンダーを見ると、

『おや?』

三十二日、三十三日、三十四日……………。

と、続いている月を、見掛けた事はありませんか？

まんまとその日を迎える事が出来たなら、

貴方は人より余分な時間を使える。

と、言う事になりますね。

只……………。

その後、

月が替わるか……………。

戻れるかは……………。

short story429 「落ちる水音— 1 —」

ピチャン……。

誰もが、聞いた事のある夜中に落ちる水音。

その音が、耳元で聞こえた事はありませんか？

『危険です』

関わってはいけません。

それは、霊達が淀みを作る音です。

或（ある）いは……。

聞いてしまったなら貴方は……。

『貴方の水を吸い盗られますよ？』

short story430 「夜中の目覚めには— 1 —」

ハッ！として、夜中に目が覚める事はありませんか？
その目覚めは、とても澄み切り、
頭は、すっきりとしています。

でも、そこで……考えてはなりません。

何故？

……その目覚めに関わった者が気付いたのなら、
貴方は……。

『朝、無事に、目が覚めるといいですね』

short story431 「部屋の明かり— 1 —」

照明はいつもと同じなのに……、
部屋の中が、暗く感じる事はありませんか？

それは……、

『居るんですよ』

貴方を待っているんです。

ほら……、

今度は、部屋が狭く感じませんか？

おや？

息苦しさも感じる様になったのでは……？

そして、視線を感じ始めた貴方は！

short story432 「桃源郷の空— 1 —」

「此処が貴方の国？まるで桃源郷ね」

薄紅色に染まる空と海を、
愛（いと）おしそうに目を細め見ながら貴女は言った。
その憂いある横顔を私は眺めながら、

「そうだね」

としか、言えなかった。

薄紅色に染まる理不尽な本当の意味を貴女に教えたならきっと……。

short story433 「終末を迎えた日— 1 —」

天から声が聞こえ、

『最後の望みは？』

と、聞かれた。

子供が応えた。

「桃色の空！ママとパパに仲直りして欲しいの」

その声は天に届き、空の雲が化粧をした。

———— 「馬鹿が！」

男が声を荒げる。

終末を迎えたこの日。

望むなら……。

只、人々は空を仰ぐ。

short story434 「雪景色の出会い—1—」

積雪の中を進む。
吹雪になっても尚……、

どちらが空で、
どちらが地面か、
もう判らない。

『最後に逢いたい』

一言を残し親父が雪の山に向かったのはタベらしい。

「親父！どこだ」

余命宣告された身体で……。

もう進めない。
冷たい手が、俺の頬を撫ぜる。
君は……？

short story435 「命の水湧く泉—1—」

天と地が判らぬ様（よう）な吹雪の日は、命の水が泉に溢れる。
僕は、愛しい人の為に探しに行く事にした。

「此処が……」

洞窟を進むと、
天井には、びっしりと水晶の様（よう）な氷柱（つらら）があり、
その下には、屍が重なって……。

泉から水を汲み家路に急ぐ。
貴女に殺されると知らずに……。

short story436 「雪の色— 1 —」

雪が鮮血の様な赤だったら……。
雪が雨雲の様な灰色だったら……。
皆……何を思うのだろう。

私は雪の日に人殺しをした。

それから彷徨っている。

自分が生きているのか……、
死んでいるのか……、
それすら知らない。

時折目に映る雪の色が……。
只、分からないの。

short story437 「体温— 1 —」

凍えてるのは私なのに……、
雪降る空が、凍えている様（よう）に見えて。

仰ぐ空から頬に雪が落ち、
頬の温かさに雪が雫となり滑り落ちて……、
自分の温かさに気付く。

凍えた木も、
私が抱き締めたら温かくなるのかしら？
貴方の凍えた死体も、
温かくなるかしら？

short story438 「雪降る宵闇の神木— 1 —」

降る雪が、止む事を忘れ降り続ける宵闇に。
木々のざわめきが……。
それは、哀しげで切なく。

神木が、地鳴りの様な音を出し、
自らを奮い立たせるが如く己の身を揺さぶる。

木々が、冬景色に新緑を添えたかと思うと、
神木は、白い樹液を流し命を終わらせた。

short story439 「雪と人魚の鱗と— 1 —」

陽の在る内は、雪はとても白い色。
月光が在る内は、雪は金色か銀色。

知っているのは私と貴方だけ。

私から雪の色の話を聞いてしまった貴方は、
皆の見ている雪の色を見る事が出来なくなりました。

『嫌？』

ならば、人魚の鱗でレンズを作って雪を見て。

short story440 「アスファルトと雪— 1 —」

アスファルトには雪は積もらず、
家や木々には雪が積もります。

アスファルトは悲しくなって、
黒い涙を流す様（よう）になりました。

けれど、
雪は、素知らぬ顔。

アスファルトは涙が止まりません。

人々の悲鳴が上がり始め……。

春になる頃、
人々はいなくなりました。

short story441 「交差点の天使と悪魔— 1 —」

スクランブル交差点の上空四隅には、
天使と悪魔が二人ずつ、交差点を見下ろしているらしい。

だから、
人は、交差点で待つ時、渡る時、空を見てはいけない。

何故？

彼らと目が合ってしまったら、
貴方は虜となり逃れられなくなるから。

そして、天使と悪魔は———。

short story442 「携帯電話は便利？— 1 —」

携帯電話を根城にする霊達が増えて来た。

『いや—便利な世の中になりましたな』

『携帯電話と言う奴ですね？』

『ええ』

『私が死んだ時は無かったもので』

『いや—此処から化けて出ると女達がキャアキャアと……』

『僕もやってみようかな』

short story443 「携帯電話は便利？—2—」

『田中さんどうですか？化けて出具合は』

『ええ、鈴木さん。なかなかのものですよ！』

『こうバリエーション？て言うんですか、最近は、その探求が面白くて』

『私もやろうかな？』

『佐藤さんも是非！』

携帯電話を根城にする霊達の熱い？夜————。

『化け方が、地味過ぎたみたいで……』

『おや、田中さんどうしました？』

『着信が有る度に、瞬きをしたんですよ！気付いて貰えなくて……』

『それはそれは』

『田中さん！その場合はですね』

『おや高橋さん、もぐりでやってましたね？』

『実は……』

short story445 「携帯電話は便利？—4—」

最近、携帯電話から幽霊が出るという苦情が殺到している！

「またですよ……」

「いっそ、御札のアプリでも売り出すか！」

ワッハハ！

「笑い事じゃないですよ！」

「切実なお客様もいらっしゃるみたいで……」

「ふむ」

携帯電話幽霊事情戦線は白熱している？